

福祉の閲覧室 第92号

2016年3月24日発行
日本社会事業大学附属図書館報
Japan College of Social Work Library Report
編集：図書館職員

Library Life

「授業後、B201 で想う」

学部 4 年 越智 大河

一冊の本には、一つの物語が綴られている。しかし、一冊の本を読むことによって形作られる世界は一つではない。一冊の本から形作られる世界は、読み手や、読み方、時代や、環境により様々な形となり、そして無限大に広がる。これこそが、本の魅力であり、それを楽しむことが読書の醍醐味であろう。私は、そんな本の魅力にハマり、読書が趣味といえるようになってから早 10 年以上。私が専ら読む本は、小説。特に、ミステリー小説がお気に入りである。

読み方により、世界観や印象がガラリと変化するものの代表格が、ミステリー小説だろう。それだけ、ミステリー小説は様々な読み方ができる。例えば、物語の冒頭から、謎解きや犯人探しをしていくという読み方。これは、頭を使い、謎解きを楽しみながら読み進めていくというスタイルである。ミステリー小説読破の王道であろう。

また、読みはじめから結末に目を通すという読み方もある。これは、結末を先に知ることにより、物語のキーとなる要素や伏線を意識し、それらの結びつきを楽しみながら読むことができるというスタイルである。

さらに、主人公や、物語の登場人物の誰かに、自分自身を落とし込んでみるという読み方もある。これは、物語に自身が入り込み、その当事者であるかのような感覚を味わうことのできるスタイルである。最も、この登場人物置き換え型の読み方は、ミステリー小説に限らず、どのジャンルにも共通する楽しみ方でもある。

ちなみに、私のミステリー小説の読み方は、やはり冒頭から。ただし、謎を解いたり、事件のトリックや犯人を推理したりしながら読んでいる訳ではない。そこまで深読みせず、作家が作中に散りばめた言葉をそのまま受け止めながら読み進めるのである。もちろん、それらの言葉は、読者を欺くための罠であったり、物語の伏線や後半への布石となったりしている。しかし、それ自体も含めて楽しむことが私のミステリー小説の読み方である。それは、ずばり“ミスリードを楽しむ”である。これは、最も作家の世界観を体感することができるスタイルであると私は感じている。

私は、作家の世界観を思い切り体感するために、今日もまた独自のスタイルで本を読んでいく。読み終えたら、何を感じるのだろうか。想像がつかないこともまた本の魅力である。そう、一冊の本には、無限大の可能性が詰まっているのだから。

本棚から1冊

『ヴェニスに死す』 トーマス・マン著、岩波書店、1960年3月

(請求番号：943-マ(3階 文庫・新書))

紹介者：大野ロベルト社会福祉学部助教



豊かな比喩、歴史や芸術にかんする深い洞察、段落のひとつひとつまで行き渡った、計算しつくされた構造。二十世紀を代表するドイツの文豪トーマス・マンの小説は早くから日本にも愛読者を持ち、影響を受けた作家も少なくない。なかでも三島由紀夫は、敬愛する作家の筆頭にマンを挙げている。

『ヴェニスに死す』(1912年発表)は、ひとときわ輝く中編小説である。あらすじはこうだ。世界的な作家、アッシェンバッハは、執筆活動からしばし距離を置きヴェニスに滞在するうちに、家族連れで同地を訪れていた美少年タッジオに絶望的な恋心を抱く。最初は度重なる偶然の出会いに満足していたアッシェンバッハだが、徐々に欲望を抑えられなくなり、尾行するなど危険な行動に出るようになる。一方その頃、ヴェニスではコレラが流行の兆しを見せていた。いち早くこの情報を入手したアッシェンバッハはしかし、タッジオ一家に知らせることをためらう。知らせれば、少年は去ってしまうだろう……。

この小説は、部分的にマンの実体験に基づいている。マンは結婚しており、六人の子供をもうけているが、きわめて強い同性愛的傾向を持ち合わせていた。またマンは生粋のドイツの気質の持ち主であると同時に、南国的な情熱を秘めた人物でもある。これはマンの母親が、ドイツとポルトガルの血を引くブラジル生まれの女性であったこととも深い関係がある。このようにマンは、一見どこまでも厳格、冷静でありながら、その内奥には起伏に富んだ、多様性に彩られた魂を宿していたのである。

『ヴェニスに死す』もまた、多様な読みを誘う小説である。例えば、観光都市であるヴェニスの行政が、コレラの流行を必死で隠そうとする場面などは、疫病の歴史をめぐる興味深い資料であろう。マンはもう一つの傑作『魔の山』(1924年)でも結核の療養所を描いており、病について多くを描いた作家であると言える。

しかしそれよりも目を惹くのは、作品の最大の主題とも言える「老い」の問題である。少年に恋をしたアッシェンバッハにとって、老いは自らの醜さの象徴でしかない。たしかに西洋の典型的な発想においては、若さは美であり、老いは醜さである。先に挙げた三島由紀夫も四十五歳で自ら命を絶っているが、三島の友人であった日本文学者のドナルド・キーンは、その理由の一つを老いることへの恐怖と推測している。だが、老いは本当に救いようのないものなのだろうか？ アッシェンバッハがタッジオの美しさを発見できたのは、彼が老いていたからではないだろうか？ そうであるならば、むしろ彼に幸福をもたらしたもののこそ、老いではなかっただろうか？

本学の学生にも、ぜひそれぞれの関心に絡めた自分なりの読みを展開してほしい。とまれ、美しい小説である。イタリアの名匠ルキノ・ヴィスコンティによる映画版(1971年)も必見。

Interview 竹内幸子 社会福祉学部教授

図書館運営委員としてもご活躍中の竹内幸子教授にお話をうかがいました。

Q1. 自己紹介をお願いします。

初めまして、竹内です。社大では数少ない「理系」の教員です。専門は物理です。2016年度は研究に専念する期間（サバティカル）を戴いているので、皆さんにお目にかかる機会が少ないのですが、後期の情報科学Bと教養基礎演習を担当します。普段は、情報科学Aや、統計学の基礎なども受け持っています。

Q2. 学生時代に図書館とどのように活用していましたか？

小中高と学校や地域の図書館には良く行っていました。いわゆる乱読というか、雑多な本を借りて読んでいました。大学生の頃には、学部の図書室で（その頃はコピーが1枚50円とか100円とかしていたので）宿題に必要な項目を抜き書きしたり、専門書を借りたりしていました。でも、専門書は読むのに時間がかかるし、書き込みもしたいので、図書館で借りた後、きちんと読みたいものについては買い直していました。その他に、大学の中央図書館にも時々行っていました。静かな暗い大きな建物で、本を読むというよりは・・・ソファで昼寝していたかも。

Q3. 学生時代に読んだほうがよい書籍を教えてください。

これまで本を読む習慣のなかった人は、まず、500ページ以上の本を1冊全部読み通してみてください。最初から、最後まで、抜かさず。ジャンルは何でもいいし、途中で無理だと思えば、別の本に代えてもいいです。とにかく1冊です。図書館には、社大の学生さんが選んだお勧め本も並んでいますよ。

本を読むのが苦でない人は、あるいは、読むことに自信がついたら、是非、古典や哲学書など、その後の人生でまず読みそうにない本を読んでみて下さい。私も学生の頃に買った久松潜一『万葉秀歌』が実は今も手元にあります。ええと、古典が得意という訳では全然ありませんけれど。与謝野晶子訳『源氏物語』も青空文庫にあるので無料で読めますよ。プラトン『ソクラテスの弁明』やフロム『自由からの逃走』など、読みやすい哲学の本を読むことも勧めたいです。悩んだり考えたりするとき、足掛かりが増えて視野に入る領域が広くなり、使える言葉が増えて考えの筋道がより正確になります。そして、悩むことは共通だなと、世界のどこかで生きている知らない人々との何とは無しの連帯感が得られる気がします。

Q4. 新入生へのメッセージをお願いします。

大学の中に居場所がないかもしれないと心配している新入生さん、それは、皆さんの先輩達も感じていたことです。将来何になりたいかわからないという新入生さん、それも、多くの先輩達が悩んでいた/いることです。教員でよければ、アカプラ面接の時などを利用して、相談しに来て下さいね。

（インタビューは次ページに続く）

Q5. 心掛けていること。

何事も経験が長くなってくると、適当に流してやっても何とかできることが多くなって、ついマンネリ化してしまうので、意識して新しいことを導入するよう気を付けています。授業の内容も、研究の方向も、日常の生活でも。最近やってみたことは、後藤先生に教えて貰いながら多数決と選択についての社会学の知見を取り入れた授業をしてみたこと、研究の範囲を広げるべく分厚い教科書を読んでいること（まだ最後まで読み終わっていない^^）、500m続けて泳いだこと（うんとゆっくりです。今度1000mを試してみよう）くらいかな。小さな事でも人生初めての事ってわくわくしますよね。皆さんも、大学生活に慣れたかなと思ったら、是非何か新しいことに挑戦してみてください！

図書館 リニューアルのお知らせ

図書館の入館方法がかわりました！

機器の老朽化およびセキュリティ強化のため、図書館の入館管理システム(入館ゲート)を新設しました。入館時は、ゲートのカードリーダーに図書館利用カード(学生証・職員証等)のバーコードをかざしてください。認証されるとゲートが開きます。図書館来館時は図書館利用カードを忘れずにお持ちください。



2階がかわりました！

2階ラウンジの椅子が新しくなり、スペースも広がりました。また、4月から新聞が2紙増え、合計6誌(日経新聞、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、東京新聞、福祉新聞)となりますので、毎日ご利用ください。新刊図書は、カウンター前の棚に移動しました。



3階がかわりました！

3階リフレッシュコーナーの椅子とテーブルが新しくなり、国家試験対策自習コーナーも配置換えをして、開放的で明るくなりました。国家試験コーナーは、グループ学習として利用することもできますが、国家試験前の11月から1月の試験日までは、4年生を優先させていただきます。また、選書ツアー図書は新刊も含め、3階に集中させました！



その他

照明のLED化工事が行われ、図書館が全体的に明るくなりました！